

北設楽地方における女の仕事着に関する調査 (第2報)

戦後から現代までの変遷

古川 智恵子 ・ 豊田 幸子

A Study on the Woman's Work Clothes in the Kitashitara District (Part II)

—Change from the Postwar to the Present Age—

C. FURUKAWA and S. TOYODA

緒 言

第1報では、北設楽地方における明治から昭和初期すなわち第二次大戦前までの女の仕事着について調査し、その性能、系譜等を報告した。

今日、北設楽地方の農村に残存する数少ない昔の仕事着を詳細に調査したとき、そこには当時の農民の労働の歴史を背景として、それぞれの地域風土のもとで農耕によく適合した仕事着の機能性と経済性がみられた。これらは、昭和初期頃までの自給経済の中で、婦人が限られた衣料を紡ぎ、織り、裁ち、縫いして着せた家族に対する愛情の表現でもあったのである。

引続き本報では、第二次大戦から現代までの社会経済情勢の変化に伴う北設楽地方の農村変貌の中で、仕事着がいかように変遷したかの観点から調査を行なった。

方 法

調査対象期間は、昭和17年以降～昭和56年の現在までとし、その他は第1報と同様である。

結果および考察

1. 戦後から現在までの仕事着一覧

表1は第二次大戦から現在までに着用された仕事着の地区別、種類別による一覧表である。いずれの地域においても共通して言えることは、戦前の仕事着すなわち長着物、腰巻形態から戦後は上半衣を標準衣または活動衣とよぶ半襦袢形態に、下半衣はもんぺの二部式に移行したことで、移行の時期は地区により多少の遅速がみられたようである。現在では上半衣としてはブラウス、綿シャツ、既製作業衣、トレーニングウェア、セーター、チョッキ、下半衣には既製もんぺ、ズボン式もんぺ、ジーンズ、既製ズボン等の広範囲な洋服式作業衣の着用がみられ、補助衣としてはかっぽう前掛、手ぬぐいを必ず着用するパターンである。

次にこれらの仕事着の着衣形態がどのような変遷を辿ったのか、地域別、作業別に年代を追って述べることにする。

2. 仕事着の着衣形態の変遷

(1) 戦前の着衣形態

表2は作業別、地域別による女の仕事着の着衣形態の変遷をまとめ一覧にしたものである。

1) 水田作業時

表1 戦後から現在までの女の仕事着の推移一覧

種類	町村名		全町村（稲武町・設楽町・東栄町・津具村・豊根村・富山村）				
	作業別						
上半衣	水田	① ↓	・きもの式作業衣	② ↓	・既製作業衣	③ ↓	・チョッキ
	畑作	↓	・ブラウス	↓	・袖なし	↓	・セーター
	山林		・綿シャツ		・綿入れバンテン		・トレーニングウェア上衣
下半衣	水田	① ↓	・もんぺ（自作）	② ↓	・ジーンズ		
	畑作	↓	・もんぺ（既製）	↓	・トレーニングウェア下衣		
	山林		・スラックス				
補	エプロン	水田	① ↓	・前かけ			
		畑作	↓	・かっぱ前かけ			
		山林		・袖なしエプロン			
助	かぶりもの	水田	① ↓	・手ぬぐい	② ↓	・つばあり作業帽	
		畑作	↓	・すげ笠	↓		
		山林		・麦わら帽子			
衣	手甲・脚絆	水田	① ↓	・手甲	② ↓	・ゴム手袋	
		畑作	↓	・うでぬき	↓	・はばき	
		山林		・軍手			
衣	はきもの	水田		・水田用地下タビ		・水田用長靴	
		畑作	① ↓	・わらぞうり	② ↓	・運動グツ	
		山林	↓	・地下タビ	↓	・ゴム長グツ	
衣	外被類	水田	① ↓	・背中あて			
		畑作	↓	・ゴム合羽			
		山林		・ビニール合羽			

前報でくわしく報告したので、ここでは着衣形態のすじのみを述べる。6ヶ町村共通の着衣形態として、長着を膝丈位に着装し、腰巻、半幅帯をしめるワンピース形態と、同地域内でも稲武町、設楽町、津具村などのように股引を長着の下に着用するという二様の形態が見られたようである。これらの形態上の風習は、婚姻等の関係で実家のある地域の着装形態の習慣をそのまま嫁入り仕度でととのえ、婚家先でも着用しているという場合と、農村等でよく行なわれる田植、稲刈り、普請等の共同作業、いわゆる「ゆい」等の機会に他町村のより便利な仕事着の形態の情報を得て自分もそれをまねるというようなことから、二形態がみられるようになったものと考えられる。

2) 畑作、山林作業時

6ヶ町村における共通着衣形態としては、長着に腰巻とはばきをつける形態である。津具村や稲武町、設楽町では、はばきのかわりにたつけやもんぺを山仕事の時に着用していたという史実は前報でも述べたとおりである。以上にみられる着装形態は昭和10～20年頃にかけて、次第に変化がみられ始め、長着と腰巻形態から、上半衣すなわち腰切と下半衣にはたつけかもんぺを組み合わせる形態が徐々に見られ始めた。しかしまだ大半の人は長着に腰巻の形態が主流であった。

表2 作業別・地域別による女の仕事着の着装形態の変遷

時代	作業別	種類 町村	上半衣		下半衣		着装方法及び時代	
戦前	水田作業	稲武町 設楽町 東栄町 津具村 豊根村 富山村	長	着	腰	巻	※長着の丈はひざがかくれる程度の長さ に着用した。	
		稲武町 設楽町 津具村	長	着	腰 股	巻 引		※長着の丈をひざ位に折って着装し股引 をはく。
		稲武町 設楽町 東栄町 津具村 豊根村 富山村	長	着	腰 は	巻 ば き		
	山林作業	津具村	長	着	た	つ	け	
		稲武町 設楽町 富山村	長	着	も	ん	ぺ	※明治35年より設楽町桑平ではもんぺを はいた。 ※富山村では昭和10年頃鉄道工事に来た 人がもんぺを教えてくれてはいた。
		稲武町 豊根村	腰	切	た	つ	け も ん ぺ	
戦後	水田・畑作・山林作業	全町 村	腰	切	も	ん	ぺ	※寒暖の調節は袖なし、ハンテン、 チョッキ、セーターなどを仕立方や素 材を変化させて重ね着として着用する。 ※山林作業の時は地厚のズボンを着用。 ※水田作業の時は水田用地下タビ、指先 のわれた水田用長グツをはく。
			きもの式作業衣	も	ん	ぺ		
			ブラウス	ズボン	式	もん	ぺ	
			かっぱう前掛					
			ブラウス	ジーンズ				
綿シャツ								
既製作業衣	既製ズボン							

(2) 戦後の着衣形態

1) 昭和20~30年

戦後20~30年の間は余り大きな変化はみられないが、昭和23年に行なわれた農作業衣改善運動により、改良作業衣、洋服式作業衣の導入を試みたが、ほとんどの婦人達は従来の仕事着に愛着を持っていた。

2) 昭和30年以降

その後高度経済成長によって、30年以後徐々に生活様式も洋風化、都市化し始めた。した

がって、仕事着も洋服形式が入り始め、ブラウスともんぺ、標準衣とズボン式もんぺとかっぱう前掛等、和服様式から和洋併用、折衷形態がふえ、ズボン式もんぺ等ズボンの長所を採用した下半衣が着用され始めている。

3) 昭和40年以降

40年以降は洋服化が徐々に進行し、既製作業衣へと変化していった。

(3) 現在の着衣形態

現在は水田、畑作、山林いずれの作業時においても、上半衣、下半衣の二部式の着衣形式で、その組み合わせは腰切と既製もんぺ、ブラウスにズボン式もんぺ及びかっぱう前掛、ブラウスや綿シャツにジーンズ、あるいは既製作業衣の上、下、又はトレーニングウェアの上下等色彩、形態も自由自在に和洋の上下を組合わせて着用している。

3. 上半衣の変遷

(1) 長 着

前報でも述べたとおり、戦前から戦後にかけての仕事着は丈の調節のみによって早がわりさせ得る和服様式の長着が主流であった。仕立おろしはよそゆき着に、少し古くなったものはふだん着におろし、仕事の時はたすきがけか、あるいは日常の労働、動作機能に支障のない筒袖、ねじ袖、鯉口等に仕立てかえて着用した。損傷のはげしい袖はとりはずして、前後、左右をかえて仕立直しをしたり、又別布で袖のみ作りかえて身頃につけたりした経済性が当時の農作業衣にみられる。

(2) 腰 切

図1-1は昭和15~20年頃に着用した形態の鯉口の活動着である。長着では足さばきが悪く

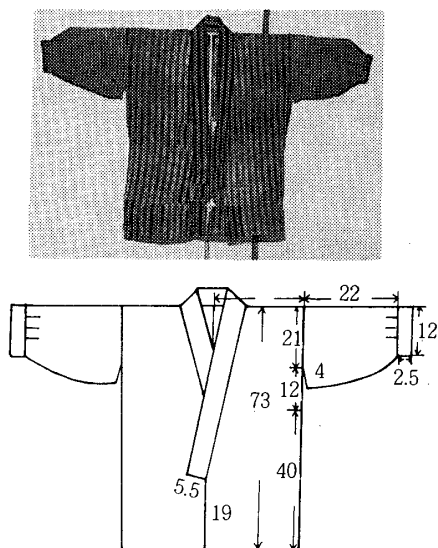


図1-1 鯉口袖の腰切



図1-2 筒袖の腰切

機能性が悪いのでもんぺを着用したが、長着では必然的に裾がつかえて着にくい、そこで腰までの丈にしたのがこの形態である。前報でも述べたが、袖口にカフスのついた鯉口Cの形態は稲武、設楽、東栄、豊根にみられる。図1-2は同じく腰切であるが、筒袖Cの袖型で東栄町に多くみられ、当地域ではフクラ雀ともナギナタ袖とも呼ばれている。以上の2種の形態は戦後二部式上衣として最も普及した袖形態である。

(3) てっぽう袖上衣

図2のてっぽう袖は、鉄砲の砲身のように腕に密着した袖形態であるが、わき下に細長いひし形のまちを挿入して腕の運動による伸びに対するゆとりを袖下にあたえている。この袖型は

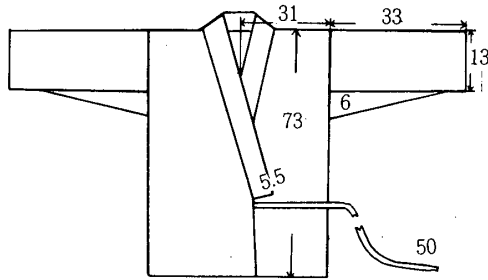
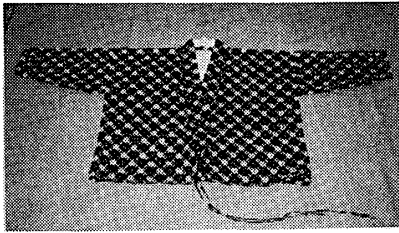


図2 てっぽう袖の上衣

戦前の稲武町，東栄町，豊根村の長着にもみられ，戦後は着丈を腰切に改良したものである。これは現在の既製作業衣の袖型とほとんど同型のものを，すでに戦前の仕事着の袖型に生み出していたもので，筒袖や鯉口よりも一段と機能的に考案したものである。

(4) ブラウス，綿シャツ，セーター

昭和30年以後日本人の衣生活も急速に洋服化が進み，特に昭和40年以降の高度経済成長にともない，既製服の普及にはめざましいものがみられる。農山村における作業衣も改良普及員や婦人会の指導により，従来の和服形式のものからブラウス式のものができるようになった。又作業衣には，よそゆき，ふだん着のものが古くなれば仕事着として着用される。綿シャツ，セーターも既製品として出回るようになり，季節に応じて着用されている。

して出回るようになり，季節に応じて着用されている。

(5) 既製作業衣

昭和40年以降の既製服の発達により，現在では北設楽郡内の農協においても既製作業衣の販売がみられた。図3-1はその資料であり，構成寸法は図のとおりである。ショールカラー，

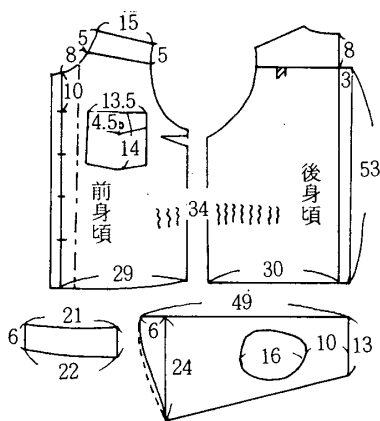


図3-1 既製ブラウス

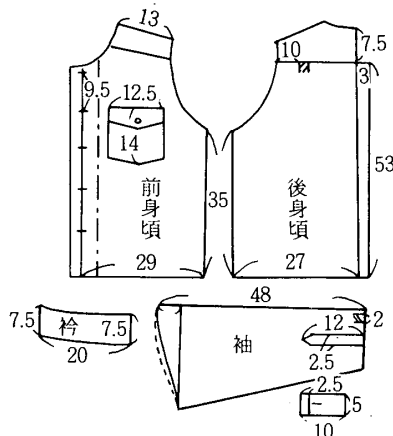


図3-2 既製ブラウス

前あきで，普通袖であり，ゴム入り形式の袖口は作業中でも上げ下げが便利であるし，既製作業衣の場合，サイズは大，中，小とあり，色々の体型の人にも合わせやすく便利である。ウエストにもゴムが入り，作業衣としても機能性に富んでいる。

図3-2はショールカラーで前あき，普通袖で袖口はカフスつきとなっているのが，作業としては不便であると考えられる。全体にステッチ始末がしてあり，おしゃれと洗たくでのじょうぶさを備えている。

(6) トレーニングウェア上衣

昭和39年の東京オリンピック以後のスポーツ熱の大衆化にともない，ニットのトレーニングウェアの普及にはめざましいものがある。ポリエステル100%あるいは綿混紡のニットの素材

は、伸縮性に富み、暖かい点で重宝され、家庭着、仕事着として老若男女に幅広く利用されている。北設楽郡内においても、ここ2～3年仕事着としての利用はめざましく、丸首シャツ形式のものから、前あきのジャンパー式のものまでの上衣は化学繊維使用の丈夫さと手軽さもあって、若い世代には大いに利用されている。

(7) 重ね着の種類 (はんでん・袖なし・ベスト・カーディガン)

季節に応じて仕事着にも重ね着が行なわれる。ゆったりとした和服形式のはんでんや保温性に富む綿入れの袖なしは、前報で構成寸法は詳しく述べたが、やはり着なれたものとして高齢者に用いられており、ニットのベスト、カーディガンも保温性にすぐれ、伸縮性に富むところから機能的であり、大いに利用されている。

4. 下半衣の変遷

(1) もんぺ (上ひも、裾ぼそ、襠方形)

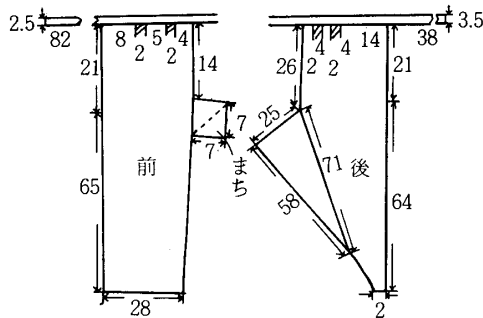
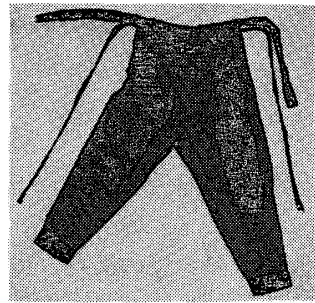
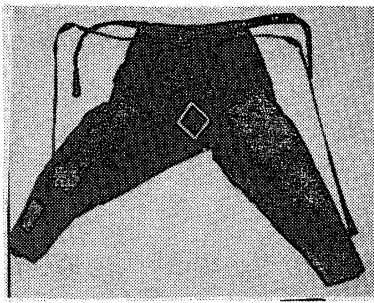


図4-1 もんぺ

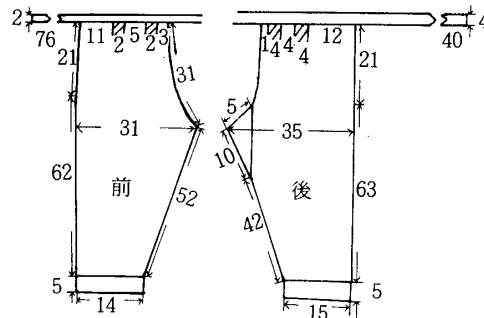


図4-2 もんぺ

図4-1
のもんぺは
戦前から使
用されてき
たものであ
るが、長着
着用の特
に高年齢者
にとって、こ
の後襠が大
きくたっぷ
りとした形
式のもの
は着やすく、手
ばなせない
ものであ
った。

(2) もんぺ (上ひも、裾ぼそ、後襠大三角)

図4-2のもんぺも戦前から使用されたもので、第一報において説明したものであるが、まだ高年齢者には手ばなせないものであった。裾口に切りかえがあるが、それは裾がすり切れたので布をつけ足したものである。

(3) ズボン式もんぺ (上ゴム)

図5の資料は、前述の図4-2の従来のもんぺと構成は変わらないが、ウエスト始末は紐ではなく、ゴムとなり非常に着脱には便利になったものである。

(4) 既製もんぺ (上下ゴム)

図6-1は設楽町の農協で求めた既製もんぺの資料とその構成寸法である。ウエスト、裾口はゴム始末となり、既製服仕立ての便利さから前後身頃つづけての一枚裁ちで、脇縫目なしの仕立てが簡便な既製もんぺである。

図6-2は水田用下衣で、足首でぴったりと密着するよう裾ぼそになり、さらに紐でくくりつけるようになって、水田用地下足袋のゴム口が合わせやすくなっているが、これは従来から

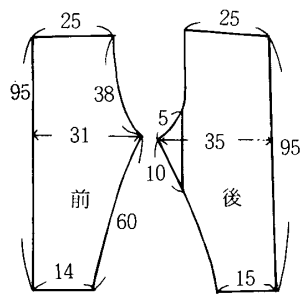
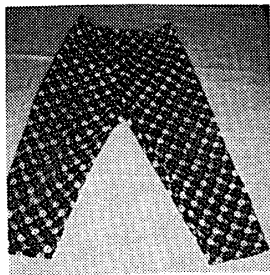


図5 ズボン式もんぺ（上ゴム）

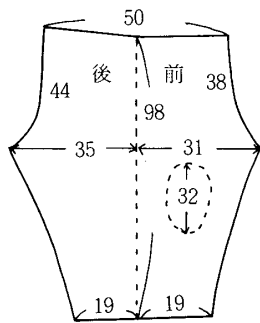
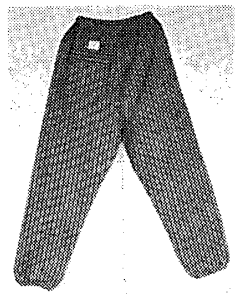


図6-1 既製もんぺ

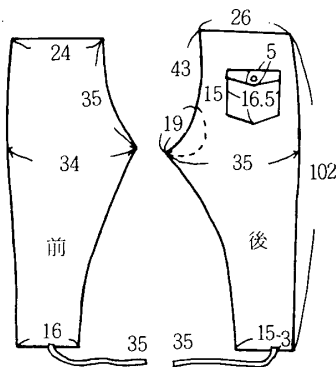
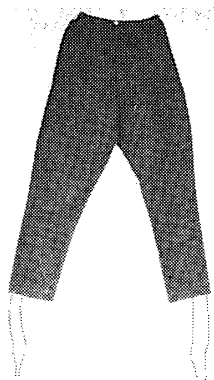


図6-2 既製もんぺ（水田用）

の股引の形を引きつぐものであり、股ぐりはズボン式となり、ウエストはゴムとなっている。

(5) 既製ズボン、ジーンズ

夏から春秋の季節には、綿の既製もんぺは中・高齢層に大いに仕事着として利用されるが、冬の寒い季節や山仕事などには素材も地厚で丈夫な化繊やウールを使用した既製ズボンが利用され、若い人々にはジーンズがもんぺに変わって利用されている。

(6) トレーニングズボン

トレーニングズボンの歴史的な背景についてはトレーニング上衣のところで述べたとおりである。化繊でジャージの素材は保温・伸縮性に富み、丈夫な点で前屈身などの作業には適しており、仕事着としての機能性に富むところから若年層には着用がみられる。

5. 上下衣の組み合わせ形態

(1) 年代別着衣形態

1) 70~80歳代の仕事着

図7の70~80歳代の女の仕事着の形態はブラウスにもんぺとかっぱう前掛のスタイルがほとんどであるが、中には写真(a)のように上衣は和服形式の作業衣でももんぺも紐でからげる形式のものを着用の人もある。この方はウエストを紐でしぼらないとシャンとしないとの事で、既製品のウエストがゴムのものを買っても自分でひもに直して着用するとの事であった。

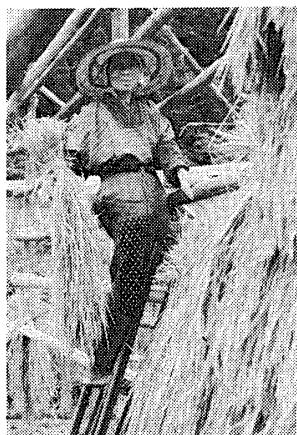
写真(f)のようにブラウスの上に和服式の衿ばんてんを重ね着したりする。頭には手ぬぐい、腕には両端にゴム入りのうでぬきをつける。はきものは地下足袋である。

2) 50~60歳代の仕事着

図8の50~60歳代の女の仕事着の形態としては長袖ブラウスにもんぺで、補助衣として、気候に応じて、かっぱう前掛やエプロン類をつける。腕にはゴムつきのうでぬきをつけるが、(a)のように既製のカフス付袖口をゴム入り袖口に更正して着同している点など、仕事着の場合は特に着心地のよさ、機能のよさが重視されているようである。なお50~60歳代には和服式上衣がもうみられなくなっていることがうかがわれる。頭にはいずれも手ぬぐいをかぶり、夏の日ざしの強い時には麦わら帽子を着用している。

3) 30~40歳代の仕事着

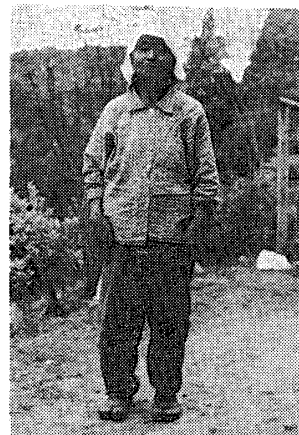
図9にみられる30~40歳代の仕事着では、ブラウスにズボンの形態ではあるが、50歳代以



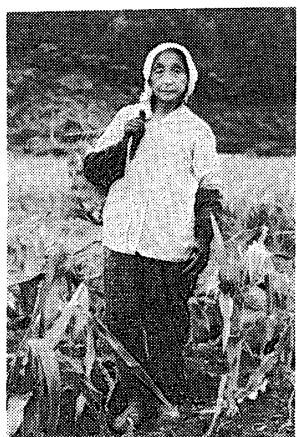
(a)設楽町



(b)豊根村



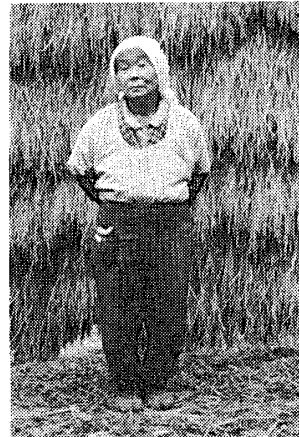
(c)設楽町



(d)東栄町



(e)津具村



(f)東栄町

図7 現代の70~80歳代の仕事着



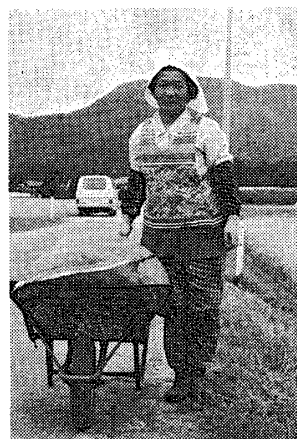
(a)津具村



(b)富山村



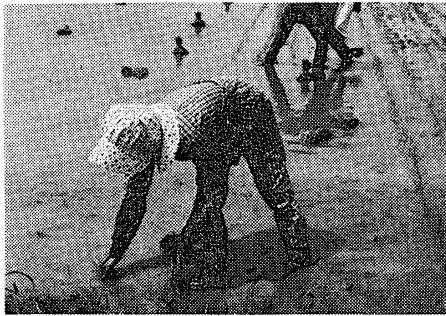
(c)豊根村



(d)津具村

図8 現代の50~60歳代の仕事着

上の年代にはほとんどの人が着用していた緋織のもんぺ着用の方は少なく、(a)のように上衣とそろいの縞模様の既製作業衣であったり、(b)、(c)のようなウール及び化繊類のスラックスであったり、(d)のように若者に最も好まれているジーンズやら、(e)のような現在ホームウエ



(a)津具村



(b)東栄町



(c)富山村



(d)津具村



(e)津具村

図9 現代の30~40歳代の仕事着



(a)



(b)



(c)



(d)

図10 水田用着衣形態

アとしても一般化してきたトレーニングウェアのジャージであったりである。補助衣として、軍手、うでぬき、手ぬぐいの着用がみられ、かぶりものとしては布製の婦人用作業帽の着用が多くみられた。

(2) 水田用着衣形態

図10は現代の水田作業と仕事着である。現代の水田作業は機械化が進み、地ならし作業、田植作業等においても機械ですることになり、人は機械を運転すればよいだけである。機械

の操作は主に男子がやっているが、それでも何台も機械があるわけでもなく、又機械のまわりきらない部分などは、まだまだ人手でもって行なわれている。北設楽地方には“ゆい”とか“手間がり”の習慣があり、隣近所で集まって行なわれる。

田植作業の女の仕事着は、長袖ブラウスにもんぺのスタイルは畑作業時と変わらないが、はきものは田植用地下足袋で、足首はクツ下の口のようにゴムあみ状で、足にぴったりと密着するように出来ており、水田内での作業がしやすい(写真b, c)。又、写真(d)のようなつま先のわかれた水田用ゴム長グツも使用する。

要 約

北設楽地方における女の仕事着の戦後から現代までの着衣形態の変遷について、当地を調査した範囲から次の結果を得た。

明治以前からひきつがれてきた北設楽地方の仕事着は、仕事の種類によって着丈を自由に調節し得る長着と腰巻に半幅帯をしめ、畑作、山仕事には、はばきをつける着衣形態が6ヶ町村の共通パターンであった。地域により、水田作業の時には股引を、畑作、山仕事には、はばきのかわりに、たつけやもんぺを着用する着衣形態であった。

この主流形態は昭和20年頃まで続いたが、その後長着物、腰巻のワンピース形態から、上は腰までの丈の和服式上半衣、すなわち標準服又は活動衣とよぶ半じゅばん形態と、下半衣はたつけかもんぺを組み合わせる上下二部式の着衣形態への変遷が徐々にみられ始めた。

昭和20～30年の間はこの作業衣形態が主流をしめ、余り大きな変化はみられなかった。昭和23年の農家生活改善普及事業による農作業衣改善運動の影響により、少数の農村の婦人達は改良作業衣、洋服式作業衣の講習を受け導入を試みたが、大半の婦人達はそれを受け入れる経済的基盤がなく、従来の仕事着に強い愛着を示していた。

昭和30～40年にかけては、高度経済成長政策によって農家の経済生活は上昇し、生活様式も次第に洋風化してきた。仕事着も今までの和服様式から、和洋併用、又は折衷の形態がふえ、ズボン式もんぺ等ズボンの長所を採用した下半衣が着用された。

昭和40年以後はアパレル産業の台頭とともに北設楽郡にも、地域によって遅速はあるが洋服化が進行し、既製の作業衣へと年次的に変化している。

現在の仕事着は、水田、畑作、山仕事いずれの作業時においても、上半衣、下半衣の二部式着衣型式である。その組み合わせは、腰切と既製もんぺ、ブラウスにズボン式もんぺ、ブラウスや綿シャツにジーンズ、あるいは既製作業衣上下、色とりどりのトレーニングウェアの上衣など、いずれの年代も既製で作られた仕事着を、色彩、形にこだわらず自由自在に和洋組合わせて着ている状態がみられた。そしていずれの地域においても、ほとんどの人がかっぽう着やエプロンを仕事着の上に着ている共通性がみられた。

以上のことから現代では、地域性はほとんど消滅し、代わって既製作業衣という画一化が進みつつあるのが現状であるといえよう。

第1、2報とも次の方々には調査に対し御協力を賜わり、ここに深く感謝申し上げます。

稲武町……今泉 常四郎氏 79歳、	鈴木 清敏氏 85歳.
設楽町……熊谷 好恵氏 86歳、	沢田 みよ氏 100歳.
東栄町……佐々木 亀鶴氏 77歳、	一の瀬 しげの氏 81歳.
津具村……村松 まつの氏 97歳、	村松 しき氏 53歳.
豊根村……青山 鉄二郎氏 75歳、	清川 さだ氏 74歳.
富山村……田辺 正一氏 80歳、	鈴木 より子氏 67歳.

参 考 文 献

- 1) 北設楽郡史編算委員会編：北設楽郡史（民族資料篇，原始篇，近世篇），（1967～1970）
- 2) 愛知県教育委員会：北設楽民俗資料調査報告(1)，(2)，(3)，（1970～1971）
- 3) 愛知県教育委員会：愛知と民俗，283～321，（1973）
- 4) 高橋春子他：衣の民俗叢書，1～130（1979）
- 5) 安藤慶一郎：生きている民族探訪愛知，17～18（1976）